

剣のえ映夕

日本剣客列伝

高橋義夫



橋義夫

本剣客列伝▽

映えの剣



講談社

夕映えの剣 日本剣客列伝

著者 高橋義夫

一九九四年一月二〇日 第一刷発行

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽二―二―二二 郵便番号 一一二―〇一
電話 編集部 (〇三) 五三九五―三五〇五

販売部 (〇三) 五三九五―三六二二

製作部 (〇三) 五三九五―三六一五

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 牧製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります

©Yoshio Takahashi

落し本・乱し本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第二出版部あてにお願いいたします。本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

目次

旋風の剣

5

影の剣

49

立つ波の剣

93

浮雲の剣

137

夕映えの剣

185

装帧
三井永一

夕映えの剣

日本剣客列伝

旋風の剣

宮本武蔵と巖流佐々木小次郎が下関の沖合に浮かぶ小島で決闘したのは、慶長十七年四月二十一日のことであるという。二天記という書物によると、巖流は細川家の藩主細川三斎が与えた舟、武蔵は家老長岡佐渡の持ち舟で小島に渡ることになっていた。ところがその前夜、武蔵の行方がわからなくなる。下関の間屋小林太郎左衛門の家にいたことが、あとで判明した。

武蔵は当日、約束の刻限になつても問屋から出て行かない。小倉から催促があつて、ようやく起き出した。手水をしておそい朝餉を食してから、亭主に頼んで櫓を持つて来させ、それを削つて木刀とした。ふたたび小倉から出立を急かせる使者が来て、おもむろに出て行つた。問屋の下僕一人を召しつれていた。

島では細川家の侍たちが嚴重に警固している。武蔵の舟がついたのは巳の刻近いころだというから、午前十時前後である。巖流が夜明けとともに舟出をしたと仮定すると、四、五時間は遅参したことになる。

巖流は猩々緋の袖無羽織に革の立付袴を穿き、備前長光の三尺に余る長い刀を帯びていた。

武蔵は絹の袷あわせに、帯に手拭いをはさんでいた。波打際を歩きながら、その手拭いで鉢巻をしたという。巖流は武蔵の姿を見ると憤然として波打際に走り、武蔵が刻限に遅れたことを非難した。このとき巖流が刀を抜き放つて鞘さやを捨てた。

「小次郎敗れたり」

「なにをもつて敗れたりとはいふ」

「勝つ気ならば、鞘は捨てぬものぞ」

そういったやりとりがあったとされている。勝敗は一瞬にして決した。怒気をふくんだ巖流の長剣が武蔵の頭上に真つ向から振り下ろされる。武蔵が同時に振り下ろした櫓の木刀が長さの利で巖流の眉間みけんを砕き、巖流の長剣は武蔵の鉢巻を切り落としたのみだった。

巖流は波打際に倒れ、とどめの一撃を加えようと武蔵が木刀を構えて近寄ると、倒れたまま刀を横に払い、武蔵の袴の膝のあたりを三寸ばかり斬った。しかし、そのとき武蔵の撃ち下ろした木刀で脇腹を砕かれ、口鼻から血を流して絶命した。武蔵は巖流の口鼻に手をあてて絶息を確認すると、検使に一礼して舟に飛び乗り、島を離れた。

後世の人々が巖流島の決闘と聞いて思い浮かべるのは、このような情景だろう。さらに江戸時代中期の講釈の潤色によって、決闘のありさまはもっとくつきりと隈くまどられて記憶されるようになった。

寛政・享和のころ、講釈師の語りをもとにした実録体小説が書かれたが、その一つに巖流と武蔵の決闘を題材とした絵本二島英雄記がある。武蔵は無三四と書かれ、実は吉岡太郎左衛門という武芸者の子で、巖流のために非業ひげうの死を遂げた父の仇を小倉沖の小島で討つという嘘八百の小説だが、そこは講釈種だけあって、決闘の描写はなかなか迫力がある。

武蔵の風体は、

——身には袷の黒小袖に、萌黄色の革袴を裾みじかに着し、手次をかけ、船中に有合う処の權を取て、中より踏み折り二ツに為て、左右の手に提たり。

という。芝居や映画の武蔵像に近いものがある。一方の巖流は、

——白き袷帷子に、布袴を高く股の上に褰、白布の帕しめ、長光の刀を挟んで船より上る。

といった姿である。

二天記とちがつて、両雄は秘術を尽してわたりあう。

巖流が踏みこんで武蔵の両足を薙ぎ払おうとしたとき、武蔵はその劍の上をおどり越え、右手の折れ權で巖流の眉間を打つ。巖流は脳骨を碎かれて満面血に染まって昏倒するが、武蔵は油断なくふたたび頭に一撃を加えたので、両眼がほとぼしり出て七転八倒して息絶えてしまう。

二天記に見えるように武蔵が木刀を捨てて倒れた巖流の氣息をうかがうというのは、武芸者としては不用心のように、講釈のようにめったに打ち殺すほうが、真に迫った感がある。巖流が燕返しに來る頭上を武蔵が飛ぶという、後世の馴染みとなった殺陣は、おそらく江戸時代中期の講釈あたりから発しているのだろう。

巖流島の決闘は史実で、佐々木巖流が実在の人物であつたことは疑う余地がないが、細かいことはなにもわからないのである。絵本二島英雄記は、巖流の性質を、

——天質狼戾にして少しも仁義の志なく。

と、書いている。そういう人物であつたという伝承でもあつたのだろうか。

巖流と仕合したとき武蔵は三十一歳とされているが、巖流が何歳であったかははっきりしない。前髪立の若武者姿は、佐々木小次郎という字づらには似合いたが、巖流の剣の師である富田勢源は、大永元年前後の生誕と推定され、仕合のあった慶長十七年より百年近い前である。勢源の没年は不明だが、八十歳を過ぎてから巖流を弟子にとったとは考えにくく、巖流は武蔵よりも年長の四十代半ばを過ぎた武芸者だったと考えるほうが自然である。

富田勢源は越前朝倉家の臣、富田九郎右衛門の嫡子で、はじめの名を五郎左衛門といった。眼病のため隠居し、剃髪して勢源と号した。朝倉勢の本拠地だった宇坂ノ庄一乗谷浄教寺村の人である。

父の九郎右衛門は慈恩という雲水から、中条流の兵法を授けられ、越前の地に根づいて富田流と称した。二子があり、兄五郎左衛門、弟治部左衛門ともに、富田流の技芸について兵法家として名を上げた。兄は剃髪したので、家をついだのは弟の治部左衛門である。

富田流は小太刀を得意とした。他流仕合は敵にいましめられていたが、勢源は一度だけみずからその禁を破ったことがある。

永禄三年五月、四十歳前後のころ、勢源は美濃に行った。そのころ美濃の国主は、斎藤山城守義龍で、兵法を好んだ。兵法指南役として、常陸鹿島の人で新当流の名人、梅津某を取りたてていた。

勢源が美濃を訪れたことを知ると、梅津は噂に聞く富田の小太刀なるものを是非みたいと、弟子に勢源の旅宿、朝倉成就坊の屋敷を訪ねさせた。成就坊は越前国主朝倉義景の叔父で、その当時勢いがさかんであった義景は、成就坊を人質として美濃に送りこんでいたのである。

梅津の申し出は、事実上の挑戦だった。

「愚僧は兵法未熟の者なれば、その望みには応じがたし。たつての望みとあれば越前に行かれるがよからう。ほかに名人上手がいる。また当流には仕合がない」

勢源は梅津の申し出をはねつけた。梅津はその言を聞くと冷笑した。

「わが兵法は関東ではかくれもない。三十六人の相弟子、みなわが太刀先に及ばず、ゆえに弟子となる。先年、当国美濃に、吹原某、三橋某という兵法自慢があらわれたが、いずれも我に及ばなかった。勢源も越前では広言を吐いて通用するかもしれぬが、この梅津の前では赤子も同様だ」

広言をそれだけでとどめておけばよかった。つい調子に乗って、

「仕合においては、たとえ国主たりとも用捨ようしやするものではない」

と、口を滑らせた。それが斎藤義龍の耳に入ったのである。

義龍は二人の家来を使者として成就坊屋敷に派遣して、勢源に梅津と仕合することを求めた。

「当流に仕合なし。無益の勝負は好むところではありません」

と、勢源は拒んだ。使者たちはいったん辞去したが、

「勢源の所存はまことにもつともなれども、梅津の過言を許しておいては他国の嘲りともなる。たつて立会うことを願う」

という義龍の伝言をたずさえてふたたび訪れた。そこまで申されるのでは、この上は辞するところにあらずと、勢源は梅津との仕合を承知したのだった。

七月二十三日が仕合の日と定まった。使者に立った義龍の臣、武藤淡路守と吉原伊豆守が検使となり、淡路守の屋敷が仕合の場である。梅津は数十人の弟子をひきつれ、勢源は成就坊から供四、五人を借りて伴った。梅津は三尺四、五寸の長い木刀を八角に削り、錦の袋に入れて持たせ

たという。勢源は淡路守の屋敷に行くと、黒木の薪の中から一尺二、三寸の短い割木を無雑作に拾い上げ、元の部分を革で巻いた。

仕合にのぞんで、真剣を用いることを梅津は主張した。勢源が相手は真剣を用いようが、愚僧はこれにて充分と、割木をかぎすので、それならばと梅津も三尺四、五寸の木刀をとった。

梅津は木刀を右脇に構える。勢源は割木をだらりと下げ、悠然とたたずむ。

「参る」

と、勢源が声をかけた瞬間に、梅津は小鬘こびんを撃たれ、よろめいていた。どうして小太刀が届いたのか、検使の目にもとまらぬ神速の技である。梅津の頭から血が流れ出した。

梅津は氣をとり直し、構えを立て直して、斜めに勢源の首に撃ちこんだ。そこに勢源の姿はなく、木刀が空を撃ったとたん、右腕をしたたかに小太刀が撃った。勢源は梅津がとり落とした木刀を足で踏み折った。

勢源の小太刀は戦場で生きる兵法で、首、手首を執拗に撃つのである。胴を払ったり、肩を撃つことはない。

梅津は脇差を抜いて立ち向かおうとした。そこまでと声がかかり、検使が割って入った。

仕合の結果を聞いた義龍は欣喜した。末代までの語り草にしたいと割木の小太刀を手元に残し、勢源に褒美を与えようとしたが、

「このような勝負は固く戒めておりますが、国主の命にそむきがたくやむなくしたことですから、下され物は受納いたしかねます」

といって固辞した。さらに義龍から対面すべき由を申し送られたが、それも辞退して早々に越前に帰国したのである。

天正元年八月、その季節につきものの強い風雨をついて、織田信長の軍勢は越前一乗谷に攻めこんだ。百年の栄華を誇り、一万余の人口を擁した一乗谷の町は焼かれ、炎が三日三晩空を焦した。

朝倉義景は一乗谷の館を立ちのき、大野郡内山田庄の六坊賢松寺に遁れ、再起を期そうとする。美しい女房たちが、とる物もとりにあえず着のまき裸足であとを追った。逃げおくれた者は追討の兵に捕えられ、毎日百人、二百人ずつ縛られて府中龍門寺の織田軍の大將陣につれてこられ、つぎからつぎへ際限もなく殺された。

義景が大野郡に遁れたのは、かねて目をかけていた平泉寺の僧兵が馳せ参じると期待したからである。四方を山に囲まれた要害の地でもあった。ところが、信長の比叡山焼き打ちの記憶も生々しく、平泉寺の衆徒はおそれをなして、義景を拒んだ。

ついに同族の朝倉式部大輔、景鏡が、信長の密書に誘われて寝返り、二百余騎を送って六坊賢松寺を包囲させた。義景は同族、旧臣に見放され、腹を切って果てた。北国の雄であった名族の朝倉は、自滅した。

地侍は早くから義景の衰運を悟り、距離を置いた者が多かったから、つぎつぎに府中龍門寺に詰めかけ、帰参を申し出る。焼け残った浄教寺村で世捨人のような暮らしをしていた勢源は、時世をよそに見て、動こうとしなかった。

二年後の天正三年に前田利家が越中に入部すると、弟の治部左衛門は高禄をもって召し抱えら

れた。治部左衛門は浄教寺村に勢源を訪ね、前田家に仕官することを勧めたが、勢源は首を横に振った。

一乗谷は東の一乗城山、西の八地山、南の砥山に囲まれた一乗谷川に沿った谷間の細長い盆地である。足羽川の彎曲して流れる北口だけ開いていた。入口にあたる北側の下城戸から南側の上城戸までおよそ半里ほど、浄教寺は上城戸から山深くへ入ったところである。

焼尽した一乗谷は灰が吹き散ったあとに草木が生え、栄華の面影はどこにもない。かつては朝倉の館を中心に侍屋敷が並び、寺、職人の町、庭などがあり、人が溢れていた。都から名士がつぎつぎに訪れ、典雅な曲水の宴なども催されたのである。

勢源は妻と少数の弟子たちとともに、ひっそりと暮らしていた。眼疾はしだいに重くなり、瞳が白く濁って来た。日の強い昼間は、ひどく痛む。つねに清水で洗い浄めているが、時おり物の影が見分けられなくなる。

しかし、それが勢源の剣の力を殺ぐということはなかった。いっそう神技に近づいたといっている。小太刀の窮極は、無刀であると勢源は信じていた。徒手空拳でも、あるいは鐔ひとつ握っていれば、長い刀に勝つはずだった。

一乗谷が廃墟となつて五年ほど過ぎたころ、諸国を修業して歩いている高弟の鐘捲自斎が、ふらりと浄教寺村を訪れた。十二、三歳の少年をつれている。

「おもしろい小僧をみつけました。案外拾い物かもしれません」といった。

拾一枚に下帯、縄を帯のかわりにしている。髪はざんばらで、全身が垢じみている。もつとも鐘捲自斎とても、裾がすりきれてささらのようになった袖無羽織を着、色が抜けてところどころ

白くすれた革袴を穿いて、赤く縮れた髪をうしろで束ねた姿の汚いことは、少年ときほど変りはない。

少年は痩せているが、骨太の体格だった。身長も伸びそうである。目に猛禽類もうきんるいのような鋭い光があった。

「小僧、名はなんという」

勢源が訊ねると、怒ったように横を向き、

「いぬぼうし丸」

と、答えた。勢源にたいして、気おくれするところがない。

「おかしな名だな」

勢源は親しみを覚えた。犬法師丸とでも書くのだろうか。少年は文字を知らなかった。

「どうにも獣じみた小僧でして」

と、自斎が犬法師丸を見て笑った。

加賀の大聖寺だいじょうじでみつけたのである。北国船ほくこくせんの草履取と呼ばれる十六、七歳の水夫かこたちと、喧嘩をしているところを自斎は見たのだった。

少年とはいえ草履取は命知らずの荒くれ者ぞろいである。痩せた犬法師丸は、棒を振りまわす年上の少年数人を相手に素手で立ち向かっていた。

「耳を食いちぎるやら、眼を突くやら、たいへんな騒ぎでしてな。しかし身のこなしが、不思議に理にかなっている。天賦てんぷの才でしょう。鍛えようによつては、使えます」

自斎がそう話すのを、少し離れた場所で、犬法師丸は眺めていたが、

「食わせてくれよ」